

【氏名】 松尾 登史子

【所属大学院】（助成決定時） 九州大学大学院人文科学府博士後期課程

【研究題目】 古代マケドニア王都ペラの成立と発展に関する研究—ヘレニズム都市概念の源流として

【研究の目的】

本研究の目的は、本受給者のギリシアにおける考古学研究の成果を日本にて発展させ、将来において日本とギリシアの文化の鎖を明らかにするための礎を築くことであった。本受給者は、ギリシア北部にて古代マケドニアの都市に関する研究を行ったが、帰国後博士課程において、これを発展させた「王都ペラの成立と発展」に関する研究を行っている。

本研究テーマの学術的意義に関して、日本においては、古代の日本にも影響を及ぼしたヘレニズム文化はその存在が一般によく知られているが、学術的には未開拓の分野である為、外国考古学の新しい分野を拓くという意味で、また、ギリシアにおいては、日本人の視点から斬新な切り口で研究を進めるという意味で、本研究は日本ギリシア双方において大いに学術的意義を持つといえる。さらに、本受給者が関わる日本とギリシアの当該分野における研究者間の国際交流が促され、また研究の結果、市民レベルの興味を喚起する機会となり文化交流が活発化して二国間の相互理解の促進につながることを期待され、本研究の社会的意義も極めて高いといえる。

【研究の内容・方法】

ヘレニズム文化を東方に伝えたアレクサンドロス大王の故国である古代マケドニア王国は、紀元前 700 年頃に勃興し紀元前 5 世紀には文化先進地域の南部ギリシアを陵駕し東地中海を束ね、一時は中東を跨ぐ大帝国として君臨した。このように世界史に大きな影響を与えた古代マケドニア人についてその実態は未だ明らかではない。

近年になり、考古学的調査の道が徐々に拓け、多くの都市（ポリス）遺跡の様相が明らかになり、またその傍らで「死の都市」というべき「ネクロポリス」の様相が鮮明化しつつある。その埋葬形態は南部ギリシアと比しても極めて特徴的であり、副葬品の豊かさも然ることながら、特にマケドニア独特の室墓とされる「マケドニア墓」の存在が注目されている。これは、蒲鉾型屋根およびギリシア神殿風の正面を擁し、その埋葬主体部を墳丘にて覆った、マケドニア独自の墓である。単室あるいは複室構造の葬室の内部は、都市生活の延長と考えられるような内装が設えてあり、被葬者は明らかにマケドニア上層階級とみられる。

この「マケドニア墓」が現れた紀元前 3 世紀第 3 四半期は、マケドニア王国がアイガイからペラへ遷都した直後であり、王国の急成長期そして絶頂期にあたる。元来遊牧民であ

ったマケドニア人らが都市生活を獲得し充実させていく中、墓形態もそれに応えるかのよ
うに様相を異にしてゆく。この光と影というべき「ポリス」と「ネクロポリス」が互いに
連動しながら変遷する様相について、新王都ペラに焦点を当てつつ中央マケドニアの諸都
市を含めた地域における分析を行い、マケドニア社会の構造を明らかにすることが本研究
の目標である。

助成を受けた期間において、本研究の基礎を築くべく、マケドニア考古学の研究史と現
在の動向をまとめ、古代マケドニアの都市と「マケドニア墓」の基礎資料の収集にあたっ
た。特に「マケドニア墓」について、収集した埋葬主体部のデータに基づき、編年を行う
べく分析を行った。

【結論・考察】

マケドニア考古学研究史：マケドニア考古学は、古文献の稀少、オスマン・トルコによ
る支配による発掘調査の遅れなどにより、ギリシア南部より遅れて開始された。その後の
研究調査の展開も、マケドニア問題等、単に古代のみならず中世および近現代をも視野に
入れて理解すべき複雑な民族的及び政治的な要素が絡んだものであった。現在では各地で
発掘調査が順調に展開している。

古代マケドニアの墓葬形態：これ迄「マケドニア墓」は総計 70 基ほど確認されているが、
中央マケドニアに分布する計 32 基の基礎資料を収集した。ペラ 6 基をはじめとして、アイ
ガイ 10 基、ヴェリア 2 基、コパノス・レフカディア 5 基、ディオーン 4 基、テッサロニキ 5
基である。これらを対象とした基礎分析において、正面形態はドリス様式が時間、空間そ
して階層的にも広く使用されていることが判明し、都市の建築物の様式との関連により、
ドリス様式がマケドニア民族の象徴として使用されていたという考察を得た。

貴財団助成金によりギリシア調査（2007 年 3 月 1 日～14 日）が実現し、本研究の基礎を
構築することが出来ました。心より感謝申し上げます。